

2008 私のおすすめ 3 作品

募集締め切り 2009 年 1 月 15 日、到着順に掲載

●杉野 実

1 ◆ 氷川きよし「哀愁の湖」

すでにナツメロとなった(?)「やだねったら、やだね」の「箱根八里の半次郎」という股旅物にはじまって、戦前の流行歌を改作した(「ドリフの改作」じゃありませんよ!)「きよしのズンドコ節」、浅草オペラか「昭和歌謡」の香りただよう「きよしのドドンパ」、歌曲「荒城の月」の名パロディとっていい叙情歌「白雲の城」、おなじみの大衆演劇に想をえた「番場の忠太郎」、時代劇ヒーローになりきって歌う「一剣(いっけん)」... などなど、この人気歌手(および作曲家の水森英夫らスタッフ)は、演歌のあらゆるジャンルを総まくりしているような感があります。そして今回いどんだのは、ロシア民謡の影響を受けたとおぼしきメロディーに、これまた甘ったる〜い(でもちょっとほろ苦い)歌詞をのせたラブソング! 詞があまりにベタでちょっと共感しにくいけど、メロディーが綺麗なのでゆるしちゃう(つまりカラオケで歌っちゃう!)! 「演歌」というジャンルの復興にむけて、がんばれきよし!

2 ◆ ドラマ『相棒』「裏切り者」

今年のじゃないだろ、なんていわないでください、事情通のみなさま。ちゃんと2008年中に再放送で見てるんですから。このドラマの最大の魅力は、「ヒマか?」・「薫ちゃ〜ん。」・「その可能性は、否定できませんね。」といった数々の名せりふ... ではなくて!、快樂殺人犯から組織知能犯、さらには「出来心」の一般人にいたるまで、あらゆるタイプの犯罪者が登場するところにあります。ここで紹介するのは、「知能犯もの」の最高傑作とっていい作品です。改造銃マニアが近所の主婦を殺害... というなにやら猟奇的な話で幕があくのですが、実はこれは単なる発端にすぎなくて、本筋は実は、「警察による組織ぐるみでの捜査費の不正流用」を追及するところにあつたのです! 右京と薫(男性です、ご存知のかたはご存知でしょうが...) は当然(?), 警察官らによるあらゆる妨害にあいますが、そこでもうタイトルの象徴的な意味もおわかりでしょう。なお、現在放送中の『相棒』season7の第1回「還流」も、なかなかこったつくりの「知能犯もの」で、右京と薫のよく知る人物が逮捕されるという、とんでもないオチがついていました。

3 ◆ 東京理科大学公開講座「大人の科学実験・落体の法則をさぐる」(7月)

おまたせしました(?), メーリングリスト「最近のもよおしから」では紹介しなかった、自然科学関係のイベントです。「落体の法則」なんていうと、もうそれだけでイカ飯食って... じゃなくていかめしくて、とっつきにくい感じがしますが、要するに「重いものほど速く落ちるのか?」という古くからの問題が、話の発端になっていました。私みたいな「科学史マニア」は、すぐに「ガリレイとピサの斜塔」

のことなんか思い出すんだけど、「そんなの、重いものが速く落ちるにきまつてるじゃん。」という人もいて、むしろそのおかげで、ますますおもしろくなったような気もしました。反対にしたり顔で（振り子周期の）平方根法則なんていいだす人もいて、興ざめな感じもしなくはなかったけど、そういういろんなことがあるからこそ、一般人が沢山（といっても 20 人ほどだが）集まるのは楽しいのですよね。むずかしい式を使わずに、ガリレイの数理的思考のあとを的確にふりかえってみせた、講師（理科大教授ではなく、高校教諭）の手腕はさすがだと思います。■

●山田 耕作

1 ◆『反核シスター –ロザリー・バーテルの軌跡』

メアリー＝ルイズ・エンゲルス著、中川慶子訳、緑風出版（2008 年 8 月）

『市民科学』にすでに紹介されたが、私からも推薦させていただきたい。2006 年 8 月に広島で開催されたウラン兵器禁止を求める国際連合 (ICBUW) の第 3 回国際大会でバーテルさんは基調講演をされ、私も聞く機会を得た。その講演の中でバーテルさんは劣化ウラン弾のナノ粒子がどのように被害を及ぼすかについて科学的に説明し、被害を過小に評価する誤りを厳しく批判された。例えば 100 ナノメートルより小さい粒子はガス状で、核物理学者の吸入モデルに従わず、自由に細胞膜などのバリアを通過し、細胞質内の核やミトコンドリアの DNA を損傷する。特にミトコンドリアの DNA はヒストンという蛋白がなく 16 倍切れやすいので危険である（『ウラン兵器なき世界を目指して』合同出版）。当時、病気で来日も危ぶまれたが、あくまで科学的に被害の機構を明らかにし、被害の真相を告発しようとする科学者としての姿勢に私は感動した。被害の起こる機構を明らかにすることが過小評価し、無視しようとする人たちとの戦いの最前線であることを教えられた。その戦闘が反核シスターとしてのバーテルさんの生涯であり、今なおその最前線で戦っている人なのである。人類を愛する科学者の手本としてこの本から学ぶところが大きい。

2 ◆『閉塞経済 –金融資本主義のゆくえ』

金子勝著、ちくま新書（2008 年 7 月）

経済問題から、医療、農業問題まで広い分野で、金子勝、内橋克人、神野直彦等の人たちは市場原理主義を批判してきた。彼らはそれに基づき小泉、竹中の規制緩和と「改革」が貧困と格差を拡大してきたことを告発してきた。現在、世界は経済危機の中にあり、わが国はとりわけ、政治、経済、学問・教育、国民の生活等のあらゆる分野で危機的な状態にある。それ故、危機の原因の解明と改善の方向が明らかにされなければならない。金子氏は本書において経済危機の原因が市場原理主義に基づくバブルの崩壊にあることを具体的に明らかにし、石油から自然エネルギーへの新たな産業革命である「環境・エネルギー革命」への転換が将来の発展への鍵であるという。そして、グローバル化ではなく、地域に根ざした経済の発展を目指すべきであるという。私は金子氏や神野氏の草の根民主主義に基づく、地域住民の

自主的、自発的活動がわが国再生にとって重要であるという見解に賛成である。自然が豊かで、民主的な地域社会の中で教育の発展もあるであろう。同時に国家レベルでは国民が、独占企業の利己的な私的活動を規制し、支配することが必要となるだろう。あわせて『世界金融危機』（金子勝、アンドリュー・デウィット著、岩波ブックレット 740）も読まれるようお勧めする。

3◆『環境危機は作り話かーダイオキシン・環境ホルモン、温暖化の真実』

山崎他著、緑風出版（2008 年 4 月）

これは環境ホルモンや温暖化の危機を否定し、疑問を提示する人たちを正面から批判した書である。いわゆる環境問題懐疑論者がマスコミに乗って無責任な見解を流布していることに対する批判である。私、山田も中西淳子氏のリスク論を批判する一文を載せている。私は中西リスク論は「被害を行政的に処理をするための政策手段に過ぎず、被害を明らかなリスクに限定することになり、必然的にリスクを過小評価するものである」と思う。環境ホルモンでは発達障害など脳の機能への影響も心配され、「空騒ぎ」という主張は人類にとって取り返しのつかない結果を生むかもしれない。明らかなデマと思える懐疑論が喧伝され、一定の影響を持つ現状はわが国のファシズムの接近を示しているようで心配である。冷静な判断力が危機と変革の時代には必要である。■

●石塚 隆記

1◆「技術倫理 1」

著者：キャロライン・ウィットベック、訳者：札野順・飯野弘之、

出版社：みすず書房、出版年：2000 年

プロの技術者って、何を考えて仕事しているのだろうか？科学者の考えていることは分かっても、技術者の考えていることが、この本を読むまで私には不明瞭であった。読後は、科学者と技術者を二つに分けることがばかばかしいことなのではないかという感想を持つ。技術者として働いている人にはお勧めの一冊。

2◆ Einstein: His Life And Universe（洋書：英語）

著者：Walter Isaacson、出版社：Simon&Schuster、出版年：2007 年

宇宙の構造、一般相対性理論、これらアインシュタインが発見した理論が、どのように見つけられたかを知りたくてこの本を読んだ。ところが、この本には発見の歴史だけではなく、アインシュタインの恋愛、挫折、友情など、アインシュタインの人間性についても多く語られていた。物理に興味を持つ人にはお勧めの一冊。

3◆「野菊の墓」

著者：伊藤左千夫、出版社：新潮者、出版年：1955 年

約 100 年前の千葉県松戸市矢切が舞台となっている小説。牧歌的な世界を読者に提供する。葛飾と松戸を結ぶ矢切の渡し舟に乗ったことがある人には、是非一度読んでもらいたい。■

●角田 季美枝

1◆『カトリーナが洗い流せなかった貧困のアメリカー格差社会で起きた最悪の災害』

マイケル・エリック・ダイソン（藤永康政／訳）

ブルース・インターアクションズ、2008 年 8 月、2940 円（税込）

2005 年 8 月末にアメリカ南東部をおそったハリケーン・カトリーナ。死者約 1800 名のうち約 1600 名はルイジアナ州の住民で黒人の低所得者層だった。ブッシュ政権の白人高所得者層優遇政策による人災であることを、社会学者の著者が政治、政策、マスメディアの状況を丹念に追跡。公共政策群でも自然災害などに関する安全保障は、国家政府が責任を果たすべき政策のひとつとして挙げられるが、公平な政策がなされていない政治状況であることが実証されている。アメリカをみならうと、日本でも起こりうる未来として説得力を感じる。

2◆『ドングリと文明ー偉大な木が創った 1 万 5000 年の人類史』

ウィリアム・ブライアント・ローガン（山下篤子／訳）

日経 B P 社、2008 年 08 月、2415 円（税込み）

先の本と打って変わって時間軸は超長大。ドングリ（Oak）とはナラ、カシの仲間である。狩猟採集から農耕生活に入る以前に、「ドングリ文明」があったとの大胆な仮説を検証すべく、ドングリの多面的な価値を、公認育樹専門家かつライターである著者があれこれ追跡。分布、遺伝子の多様性、食文化、建材・建築（寺院、船）、インクなど、筆が非常に達者で、万華鏡のよう。仮説検証のジグソーパズルは埋まっていない感は否めないが、ドングリによる世界構築力は見事。

3◆『まほろ駅前多田便利軒』

三浦しをん

文藝春秋、2006 年 3 月、1680 円（税込み）

旧友にころがりこまれて 2 人で営む便利屋の仕事の機微。一話完結の連作小説。一話ごとの家族群像より、舞台とおぼしき東京都町田市という「場所」が主役かも。そういえるほど、町田のおもしろさ、満載。■

●梶 雅範

1◆「日本の研究教育力の未来のために 競争的施策の課題」

竹内淳（たけうち・あつし）（『現代思想』2008 年 9 月、164-174）

「大学の困難」というタイトルの 1990 年代以降の「大学の荒廃」を特集した『現代思想』2008 年 9 月号に掲載された論文です。著者は論文には、半導体工学と専門を記しているだけですが、早稲田大学理工学部の教授の方のようです。論文は、2000 年頃から始まった、文科省の「競争的施策」の批判です。現在の日本の研究費配分は、業績主義による単純競争とする欠陥の多い審査制度に基づくもので、そのために論文数の多い上位 10 校に集中的に研究費が投下されるだけで、それは上位校をますます富ませるもので、中堅の大学を育てることができないと批判しています。日本の大学において、上位 10 校の研究能力は世界的に決して低くなく、むしろそれ以外の研究能力の低いことが問題で、そのためには研究費はむしろ、上位 10 位以下の大学に投下した方が、日本全体の研究能力の向上につながると主張しています。アメリカは、そのことに四半世紀以上前に気づいており、研究費配分にあたって、「新たな人材の育成や拠点の形成を図れる」場所にも投下することで、下位の大学の研究費配分の割合が増加するように努めてきたといいます。一読に値します。関連して、中井浩一『大学「法人化」以後 競争激化と格差の拡大』中公新書クラレ、中央公論新社、2008 年も力作でお勧めします。

2◆『裁判員制度の正体』

西野喜一 講談社現代新書、講談社、2007 年

今回発足した裁判員制度なるものが、拙速でつくられた無用の憲法違反の無用の制度であることを説得的に論じています。最終章ではどのようにこの制度から逃れ、やがてはこの制度を廃棄させることができるかについても具体的に論じています。なお『現代思想』2008 年 10 月号はこの裁判員制度の特集で、小田中聰樹（おだなか・としき）という法学者が、裁判員制度がどのような時代背景で出てきたのかについて話をしたインタビュー記事があります（小田中聰樹「あるべき「司法への国民参加」とは」）。小田中氏によれば、政財界の規制緩和戦略が背後にあり、事前規制緩和によって頻発すると予想される紛争解決に見合うかたちに司法制度を作り替えようという意図が事の発端であったといいます。この動きに、民主的な司法改革を進めようとしていたグループが飲み込まれ、陪審員制度でもない参審制度でもない中途半端な裁判員制度なるものが論議不十分のままにつくられてしまったとのことでした。

3◆ マキノノゾミ作「東京原子核クラブ」

俳優座劇場（東京・六本木）（2008 年 8 月 30 日-9 月 7 日）

朝永振一郎をモデルにした人物を主人公にした劇作家のマキノノゾミの戯曲です。とてもよくできている戯曲で、俳優たちもじつによい演技で、戦前の理研の周辺の若手の物理学者たちの日常の雰囲気がよく出ていました。科学や科学者を題材にしたフィクションは、それほど多くはないのですが、笑わせてしかも戦争や科学者の社会的責任まで考えさせる点で、ハイゼンベルクとボアの対決を描いたマイケ

ル・フレインの「コペンハーゲン」以上のできだと思いました。この作品は、もともと東京国際フォーラムのホール D のこけらおとしのために東京都から依頼されて、マキノノゾミが書いたものだそうです。原作は、ハヤカワ演劇文庫に『マキノノゾミ (1) 東京原子核クラブ』に収録されています。マキノノゾミには、寺田寅彦をモデルにした「フユヒコ」という作品があり、新宿の紀伊國屋ホールで 11 月に上演されました(劇団青年座)。こちらも見ました。寺田と妻、子どもたちとの葛藤、寺田物理学の評価など重い主題を実にうまく料理して、笑わせほろっとさせ考えさせます。「フユヒコ」は、NHK 教育の「劇場中継」でも放映されました(12 月 12 日)。なお、どちらの劇にも、物理学者、仁科芳雄をモデルにした人物が出てきます。■

●榎木 英介

1◆『反貧困』(湯浅誠 著、岩波新書)

今年読んだ中で、最もインパクトがあったのがこの一冊です。

格差をこえて貧困が社会問題となっている昨今、貧困が自己責任ではないこと、一度落ちたら這い上がるできないという「溜め」のない社会であることを明らかにし、当事者の連帯を呼びかけています。

湯浅さんには大きな刺激をうけています。

私立武蔵高校卒で、東大法学部卒というエリートの出自。実兄が障害者。研究者の道を捨て、一貫して現場で手を動かし、体を動かし活動しているということ。今日も「年越し派遣村」村長をされている様子をテレビでみました。

http://www.moyai.net/modules/weblog/details.php?blog_id=444

先日 NHK の視点論点で語られているところを見ました、現場で活動してきた人がもつ説得力と力強さを感じました。

私たちの NPO も、ポストク問題を中心に、若手研究者の問題を訴え、当事者の連帯を訴えています、もっと現場でもがかないといけないと痛感します。

2◆『正社員』の若者たち—就職氷河期世代を追う』(小林美希 著、岩波書店)

岩波の本ばかりで、しかも科学書ではなくて恐縮ですが、こちらも大きなインパクトを受けました。

非正規雇用やホームレスの問題は、大きな社会問題ですが、しかし、「正社員」として働いている若者も決して幸せではない。低賃金、長時間労働で厳しい生活を送っている...

私も今年一年、残業が月 150 時間を超えるような長時間労働で苦しみました。そういう意味でも身につまされました。

たまたま著者の小林さんと知り合うこともできましたので、その意味も込めて、この一冊をあげておきます。

3◆『アメリカのシンクタンク—第五の権力の実相』(横江公美 著、ミネルヴァ書房)

結局、科学書を一冊もあげられませんでした。すみません。

アメリカでは、どうしてシンクタンクが力を持ち、政策形成に大きな役割を果たしているのかを具体的に解説した本。

市民研もそうだと思うのですが、私たちの NPO も、政策に対してキチンとものを申すことができたらと常々考えています。アメリカの事情が日本にすぐ導入できると思えませんが、市民からの政策提言社会を目指して、活動していきたいと考えています。そういう意味で、大きな刺激になりました。

この類の本としては、『若者のための政治マニュアル』(山口二郎、講談社現代新書)、『政治を変える情報戦略—最大の経済問題を解決するアーキテクチャー』(水上慎士、日本経済新聞出版社)も大きな刺激を受けました。■

●富田 やほ子

2008 年 11 月惜しくもなくなられた小澤勲さんが癌での死期を宣告されてから書かれた

1◆『痴呆を生きるということ』岩波新書

を第一といたします。

母がアルツハイマー病となり、昨年今年の 3 作品には同じ著者の方の『認知症とは何か』を上げてさせていただきましたが、こちらは書名におののいておりましたが、なくなられて改めて拝読し、これこそ本当の仕事、すごい本、すごい方とおもいました。まさに、痴呆という言葉を認知症へと変える、原動力となられた方の御本です。

私が今、障がい者理解されないものとして、痛切に感じている、病者と介護者の人権のために、まことをつくしてくださり、こころから感謝いたします。

書評オンライン書店ビーケーワンでの書評に共感しました。ご参照いただければ幸いです。こういうものが市民の真実の声、書評とおもいました。

岩波書店の冊子『図書』2008 年 11 月臨時増刊号「私のすすめる岩波新書(3 作品)」のなかで 3 名の方が小澤勲さんの著書をあげておられます。

この本は、ピアニスト・著述家の青柳いづみこさんがただ 1 冊としてあげておられ、その推薦文は胸に迫るものがあります。ほかの方のすべてのものともあわせてご参照の価値があるとおもいます。

後 2 作品は市民科学研究室で知り合った方の労作を、図書館員として知りましたので、あげさせていただきます。

2◆古田ゆかりさん 『日本FOOD記』(2008 年 4 月刊)

古代から現代までの食の歴史を楽しくわかりやすく 図や文でまとめられたもの。

年表もついています!

子どもの調べ学習の相談など時、図書館員にも役立ちそうです。学校に配布もされたとかかれてあり

ましたが、すごいです。

3◆ 懸樋哲夫さん 『デジタル公害 ケータイ ネットの環境破壊』(2008 年 6 月刊)

長年のデータ、資料収集、おもいのこもった 1 冊ですね。

図書館で相談を受けることもあるのですが、案外こういう本はないのですよ。

市民の皆さんに向けられた御本とおもいます。■

●住田 朋久

1◆ 宮本英昭ほか編(2008.01) 『惑星地質学』 東京大学出版会

<http://www.amazon.co.jp/dp/4130627139>

<http://www.utp.or.jp/bd/978-4-13-062713-9.html>

太陽系探査の最新の知見。

ここ最近にも多くの発見があることを知り、涙できる。

2◆ Chick Corea & Hiromi Uehara "Deja Vu" in "Duet"

ジャズピアノ (四手)。大曲を見事に弾ききる。

<http://jp.youtube.com/watch?v=69E1v-FWtSc>

[私は napster でお金を払って聴いています。]

3◆ ファイル共有システム「Dropbox」

<https://www.getdropbox.com/>

とにかく操作性が抜群。

自分の PC のフォルダと同じように、コピペで共有ができていく。

4◆ 須藤斎(2008.11) 『0. 1 ミリのタイムマシン 地球の過去と未来が化石から見えてくる』

くもん出版 (くもんジュニアサイエンス)

<http://www.amazon.co.jp/dp/4774314366/>

1976 年生まれの若手研究者によるケイソウ研究の紹介。

悩みながらも着実に成果を残していく。■

●石坂 信之

1◆ 大野晋『源氏物語』、岩波現代文庫（岩波書店）、2008 年 9 月

2008 年は源氏物語千年紀にあたるといわれ、関連本がたくさん出ました。その中で読み応えあるこの本は 1984 年に出版されたものが文庫化されたものです。大野さんは「日本語の起源」で知られている言語学者で、残念ながら、この文庫版を見ずに 2008 年夏に亡くなられています。

この本の主題は 2 つに絞られます。1 つ目は紫式部の話です。紫式部は最初に書いた源氏物語の評判から藤原道長に見いだされ、道長の娘彰子付の家庭教師として宮廷に召されます。紫式部はそこで、当初の物語を発展させますが、そこには道長との確執が浮かんでくるというものです（紫式部日記）。2 つ目は源氏物語 54 帖の成立論です。現存する源氏物語 54 帖のことばの解析、登場人物および物語の底流にあるものを読みとって物語の元の姿を示したものです。1 つ目の内容については解説の丸谷才一さんが疑問を呈していますが、2 つ目の成立論は、武田説（昭和 25 年）を補強発展させたものであり、私にはぴったり合点がいきます。昔、源氏物語を読んだ時、話の展開に違和感を感じたことが解消されました。この論説については、大野晋さんが 1984 年に提示しているわけですが、国文学では無視されてきています。

ちょっと脱線しますが、現在の「夕顔の帖」の歌の解釈はとても気になります。源氏が夕顔から初めて歌を贈られた歌について「源氏の君とお見受けいたします……」という解釈がされていて、現在はこの解釈ばかりですが、私はこの解釈は怪しいと思っています。「夕顔の帖」は、恋しい頭の中將が自分を探し求めて来てくれたのではないかと、夕顔が期待し勘違いしたことからは始まっているのに……、と私は憤慨しています。もしご興味を抱かれたらぜひこの本を傍らに、寂聴訳源氏物語の文庫 2 冊（花散里まで）をお読みください。大野晋さんの論述と私の憤慨を一緒にできるわけではないのですが、良く吟味すれば紫式部がいかに巧みなストーリーテラーであるか、そのことに合点がいくと自ずと答えがでけると信じています。

2◆ シネマ歌舞伎 野田版鼠小僧、東劇、2008 年 9-10 月再上映

野田版鼠小僧をご覧になっていない方は、人生の損をしているとまで書いては大げさすぎるでしょうか。確か 2009 年 1 月にも野田版以外のシネマ歌舞伎が上映されますが、私が保証しちゃうのは、野田版です。野田版歌舞伎とは何か、といわれれば「演ずる役者は私たち観客と同じ時代の言葉をしゃべり、私たち観客は役者と同じ時代の衣装を着ている、と錯覚する」とでも言いましょうか。野田版は歌舞伎の活きの良さが身上で、私たち観客と同時代性を持っています。

鼠小僧ですが、主役の鼠小僧はいい加減な守銭奴でしかも破局的な性格ですが、最後に「意図に反して」盗んだ金をばらまき死んでいくという設定です（実は、野田版 3 作の主人公は「意図に反した」運命に陥ります）。主演の勘三郎（当時勘九郎）が熱演しています。アップになった汗だくの顔やつばが飛んできそうな顔が見られるのもシネマ歌舞伎の面白さです。シネマ歌舞伎野田版 3 作の中でも鼠小僧が特に嬉しいのは、冒頭、江戸時代の歌舞伎小屋で鼠小僧が演じられ、小屋から出てきた庶民が鼠小僧の話をお話を口々にするというところから展開するところ、さらに実際に演じられた歌舞伎を映画にしているた

め歌舞伎が上演された時の現代の観客も映っているところです。歌舞伎はちょっとと敬遠される方、毎年秋に上映されているのでシネマ歌舞伎野田版をご覧ください（シナリオ本は、野田秀樹、野田版歌舞伎、新潮社、2008 年 8 月）。

3◆『未知の道シリーズ 3 大山 北尾根・支尾根』、岡澤重男、風人社、2008 年 8 月

書店で見ることがむずかしい、どちらかというとマイナーな本を紹介します。丹沢を愛する著者がひたすら丹念に山道をたどったブログが発端となって、風人社の目にとまり、出版された前著（未知の道シリーズ 1 誰も知らない丹沢、2006 年 1 月）に引き続き、出版されたのがこの本です。山の案内書ではなく、著者がこだわった山道探しの、味わいの本です。どの案内書にも書かれている道では味わえない丹沢であり大山（いずれも神奈川県）を静かに語っています。かつては登山者や村人が使った道、決して危険を犯しているのではなく、丹沢、大山を味わう、あたりまえの道を求めています。私はこの本が出される直前に著者の友人となり、ブログ（「ようこそ山へ！」で検索できます）にあったヨモギ平の写真を見て「この道を行きたい」とリクエストし、案内していただき、心に残る山旅をいただきました。静かに山を味わいたい方は、この本のどの 1 編でも構いません、著者と一緒に静かに山を歩くつもりで、読んでみてください。■

●長岡 智子

◆ アダム・カバット著

「江戸化物草紙」小学館

「ももんが対見越入道 江戸の化け物たち」講談社

「妖怪草紙 くずし字入門」柏書房

黄表紙の妖怪物語から、当時の江戸文化を面白く分析した本です。

日本人以上に、日本の文化に詳しい著者の筆が冴えています。■

●藤原 美佐子

1◆「神田川再発見」

編著：神田川ネットワーク、発行：東京新聞出版局

歩けば江戸・東京の歴史と文化が見えてくる、を合い言葉に、神田川ネットワークのメンバーが5年間かけて踏査し、まとめた力作です。水源から河口まで、暗渠化され、今は遊歩道になった支流まで、徹底的に調べました。神田川沿いを景観誘導区域に定めて、そこにかかる橋からの景観を保全しようという東京都の動きもあります。川を中心として川を向いたまち、川に親しみ川で遊ぶ文化を復活させたいものです。皆さまもぜひ、本書を片手に川沿いを歩き、東京の今と昔を知ってください。

2◆ 雑誌「中央公論 Adagio 2008/12月号」

編集：(株)中央公論新社、発行：(株)読売メディアセンター、偶数月25日発行

(都営地下鉄の各駅で無料で配布しているフリーペーパーです。ですから、このコーナーにはちょっとふさわしくないかもしれませんが、面白かったのでおすすめします。)

この号は『樋口一葉と春日を歩く』という特集。彼女に縁の深い本郷菊坂の伊勢屋質店の写真も美しく、明治時代という社会背景の中で、彗星のように駆け抜け24才で夭折した一葉の軌跡を見事にたどってくれています。私だけかもしれませんが、今まで知らなかった一葉の魅力、才能、信じられない力強さに気づかせてくれました。うら若い乙女の少女文学、ほのかな恋物語だと思いこんでいたあなた！ぜひ読んでみてください。

3◆「痴呆を生きるということ」

小澤 勲 著、岩波新書

私が最初にこの本を読んだのは、2003年の9月、母が亡くなる2ヶ月前のことでした。その2年前から、アルツハイマーを患いながら末期癌の闘病を続けていた実母を介護看病していたのですが、医師との関係や薬の管理などに神経質になるあまり、どうしても痴呆という症状を受け入れられず、痴呆って逃げなのではないか、私を困らせようとしているのではないか、試しているのではないか、などと湧き起こる悪魔の気持ちとの闘いに疲れ、少しも優しくなれず、このままでは母も私も死んでも死にきれないと感じていました。そんな時、「痴呆を介護する立場ではなく、痴呆を生きる患者の心に寄り添って書かれた本」という新聞の書評が目にとまり、藁にもすがる気持ちで本屋に走りました。本当にすごい本だと思いました。そのすごさの秘密は最後の頁にあったのですが、私は目から涙と鱗をぼろぼろ落としながら一気に読み上げ、そして読み終えた時には澄みきった気持ちですべての疑問や誤解は氷解していました。私にとってこの本と巡り会ったことは「豊かさとは何か」との出会い以来の快挙だと言えます。

痴呆症は脳疾患による記憶障害を代表とする症状群ですが、その原因の大半を占めるアルツハイマーや脳血管損傷は病理学的に解明されておらず、治療法も確立されていません。痴呆の症状には、全患者

に共通の中核症状と、心理的、身体的、状況的要因が加わって二次的に生成される周辺症状とがありますが、原因や治療法などが解明されない中で、中核症状がもたらす不自由に、一人ひとり異なる性格や生き方、周囲との関係がどう絡み合っていくか、その過程を著者は「痴呆という生き方」と表し読み解こうとしています。

痴呆症の経過の段に、耕治人さんの「そうかもしれない」からの引用があります。私はこの小説が耕さんの絶筆になったと知り、20 年ほど前に読んだのですが、当時はただ侘びしいとだけ感じた「そうかもしれない」という語のもつ深い意味が、その時は心の底から理解できました。痴呆を病んだ人々は、記憶喪失というどうしようもない事態の中で、これが真実ですよと言われても確認する術もなく、開き直って受け入れるしかない。でも「そうだ」とは言えない、言いたくないから「そうかもしれない」と言う。受け入れたからといって何も打開されはしないのに……。この言葉には、このような深い思考と諦念が込められているのです。彼らは普通の人と同じように、もしかしたらそれ以上に、意志を持ち思考しています。そして、次の瞬間には記憶を失ってしまうことを受け入れながらも、心と意志を持ち続け、思考し続ける誇りを持っているのです。

本書は、将来痴呆という病を得るかもしれない私たちすべてが、呆けても意志と心を持ち、痴呆という状況を引き受け、折り合っていく生き方を見つけるために、痴呆を介護している人だけでなく、みんなに読んでほしい本です。痴呆になっても不自由だけどさほど不幸ではないと言えるためには、周囲の人に愛され身の丈を精一杯生きるしかありません。逆に痴呆を病む人の不幸と悲惨は、周囲の私たちがつくり出しているのです。人間一人ひとは、生命の海の上に無限に繋がりたいゆとう網の一つひとつの結ばれなのですから。

最後の頁で明らかにされた“すごさの秘密”とは、著者自身が肺ガンで余命 1 年を宣告されてからこの本が書かれたということでした。彼は痴呆を病んだ人々がその透き通るような明るさの中で、日々を感じ、考え、諦め、誇りを持って生きているということを、文字どおり生命がけで私たちに伝えてくれました。この書は、精神科医の立場を超えた一人の人間としての小澤勲さんの、痴呆を生きる人々を含め私たちみんなへの、誇りを持って生きて欲しいという切なる願いと、限りない愛情が込められた遺書なのです。

富田やほ子さんの推薦文を読み、昨年小澤さんが亡くなられたことを知り、追悼の意を表するとともに遅れて推薦させていただきました。■

●山口 直樹 (北京大学科学と社会研究センター)

1◆ 遠藤誉『中国動漫新人類—日本のアニメと漫画が中国を動かす』(日経 BP 2008)

現在中国のなかで、中国の青年たちの心をもっともとらえている日本文化のひとつに日本動漫(アニメや漫画)があることは、よく知られていることに属するだろう。

かつて中国では日本のドラマが、青年層を中心に高い人気を誇っていたのが、現在は韓国のドラマにやや押され気味という状況である。それに対して日本動漫の人気は、依然として他の追随を許していない。中国で日本のアニメ「鉄臂阿童木」(鉄腕アトム)が、はじめてテレビ放映されたのは、改革開放後の 81 年のことでした。

これをきっかけに「花仙子」(花の子ルンルン)「聡明一休」(一休さん)「机器猫」(ドラえもん)「機械戦士高達」(機動戦士ガンダム)「足球小将」(キャプテン翼)「蠟筆小新」(クレヨンしんちゃん)「櫻桃的小丸子」(ちびまる子ちゃん)、「名探偵柯南」(名探偵コナン)「龍珠」(ドラゴンボール)「火影」(Naruto)「新世紀福音戦士」(新世紀エヴァンゲリオン)、「美少女戦士」(セーラームーン)「灌籃高手」(スラムダンク)などが次々に放映され中国の青年たちの心をとらえていくことになる。これらの動漫をまったく見たことがないという青年は、日本でも中国でもほとんどいないであろう。

中国で「80 後」といわれる 80 年代以降に生まれた世代は、子供の頃から毎日、これらの動漫を見ながら育ってきています。日本動漫は、彼らの精神形成にも大きな影響を及ぼすにいたっています。

ですから、現在では「たかが動漫」とはいえず、これらの動漫をぬきに中国の青年を語れなくなっているといっても過言ではないような状況が生まれてきている。

今日の中国における日本の動漫の影響についていえば、日本動漫の展示会や漫画家のサイン会をはじめとして日本のアニメを日本語教育に使ったアフレコ大会、日本動漫のコスプレ大会、「もし私がドラえもんだったら」という題目がテーマになる日本語スピーチ大会、2007 年 12 月 28 日に北京大学にやってきた福田氏を「のび太くん」と呼ぶ中国の青年たちなどなど枚挙にいとまがないのである。

このように現在の中国は、「日本動漫大好き！」という青年を多数生み出している。こうした現象は、日中のメディアでもよく報じられる。

一方、現在の中国ではテレビメディアなどで抗日戦争のドラマが、日常的に放送され、歴史教科書問題や靖国問題などに関して、2005 年 4 月の「反日デモ」に見られるように中国の青年たちの対日感情は、反日感情になって噴出していることが報じられる。

これらは、どちらも同じ中国の青年に関する報道である。では、中国の青年の「日本動漫大好き！」という日本に対する愛着の感情と歴史教科書問題や靖国問題における日本に対する険悪な感情の関係は中国の青年たちのなかでは一体どうなっているのだろうか。

また、最近、中国政府は、ゴールデンアワーにおける外国の動漫(そのほとんどは日本動漫)の放送を禁止した。その背景には、一体、中国社会のどういう事情があるのだろうか。

そのことにはじめて本格的な分析を加えた仕事があられた。その仕事こそ遠藤誉著『中国動漫新人類—

日本のアニメと漫画が中国を動かす』(日経 B P 2008)である。膨大な取材を積み重ね、これまで語られなかった新しい事実を掘り起こしたこの本は、現在、日本で、大きな反響をよんでいる。

著者の遠藤誉氏は、1941 年に「満州国」の首都、新京(現在の長春)に生まれ、苦難の末に日本に引き揚げてきた(その経緯は遠藤誉『チャーズ』に詳しい。またこの作品は、山崎豊子の『大地の子』との著作権をめぐる裁判でも知られる。)あと物理学者として出発し、その後 1980 年代から日本に留学してくる中国人留学生の増加にともない日本での中国人留学生の世話に専念するようになったという経歴を持つ日本における中国人留学生をもっともよく知っているといつてよい人である。

その遠藤氏が、『中国動漫新人類—日本のアニメと漫画が中国を動かす』(2008)を書くきっかけになったのは、1990 年代半ばからの中国人留学生の変化に気がついたことだったという。遠藤氏によれば、1990 年代半ばからの日本に留学した中国人留学生は、中国という国や政治体制への思い入れが淡泊になり、中国という国を突き放して考える青年が増えてきたという。また遠藤氏が 2000 年に行った意識調査によれば、日本留学の理由として従来なら「日本は経済や科学が発展した国だから」と答える中国人青年が多かったのが、「日本の動漫(アニメや漫画)を見て育ってきたから」と答えるものが多かったという。このような事態に遠藤氏は「日本のアニメや漫画のなにかが、中国の青年をこれほどまでにひきつけるのだろう」と考えるようになり、本格的に中国の青年たちと日本の動漫の関係を調べてみようと思案するに至る。その結果、書き上げられたのが『中国動漫新人類—日本のアニメと漫画が中国を動かす』(日経 B P 2008)なのである。日本のアニメや漫画そのものにはそれほど詳しくなかった、遠藤氏が、この問題の本質に迫り分析を加えていくさまは、スリリングですらある。

タイトルになっている「中国動漫新人類」は、著者の遠藤氏のネーミングですが、これは、中国で「80 後」といわれる 80 年代以降に生まれた世代で、子供の頃から毎日、日本動漫を見ながら育ってきたこれまでの中国人とはちがった新しいメンタリティをもった中国人青年のことを指します。遠藤氏は、この「中国動漫新人類」が、中国の政治体制や文化を大きく変える可能性をもっていると考え、こう述べている。

「未来をつくるのは常に若いひとたちだ。ゆえに明日の中国をつくるのは、「日本動漫大好き！」の「中国動漫新人類」たちだ。彼らを知ることは、中国の未来を知ることであり、中国の未来とつきあうことである。」と。

この本は、日中関係論、日中比較文化論、サブカルチャー論などさまざまな読み方が可能だが、いまもっともエキサイティングな中国論であることは間違いないだろう。ぜひ手にとって読んでいただきたい一冊である。

(なお、私は中国の「オタク」(なお中国には「オタク」という言葉には日本のようなマイナスの意味はない。)たちから声をかけてもらい 2008 年 3 月、著者の遠藤氏に北京で会うことができた。)

2◆ 加藤周一、ノーマ・フィールド、徐京植『教養の再生のために—危機の時代の想像力』(影書房 2005)

2008 年 12 月 5 日に加藤周一氏が亡くなった。1919 年生まれの 89 歳でなくなった加藤周一氏には、私は一度だけあったことがある。

加藤周一氏が中国の清華大学で講演を行ったときだった。

加藤周一氏は、国際交流基金の招きに応じて清華大学で講演を行っていたのである。

戦前・戦争を知り、戦後のリベラリな知識人、ヒューマニストとして、言論を展開した評論家だった加藤氏とは、笹本征男氏から教えられた ABC C (アメリカの原爆調査団) のことについて話したのが最初で最後の交わした言葉となった。

そして、加藤氏からは、そのことは『羊の歌』に書いてあるよと教えられた。

さて『教養の再生のために』は、徐京植氏が東京経済大学に加藤周一氏とノーマ・フィールド氏を招聘しておこなった講演と、徐氏が加藤氏にラジオでおこなったインタビューを中心にして編集されたものである。

この教養というものを語るのに加藤氏は非常に適任の人だと読んで感じた。加藤氏は、「教養とは何か」「かつて存在し今は死んだのか」「再生は可能か」というところから話をはじめている。

加藤氏は、車のたとえを用いながら「教養」というものを説明している。

簡単に言えば「車を作るのは技術、行く先を決めるのが教養」という説明の仕方をしている。

技術的知識、実効的技術も当然必要なのだが、「知識の横断的教養」「実業になはならない教養」が無ければ技術は行く末を知らぬままに暴走していくだろう。

車が幾ら早く走れても、ナビゲーションがあっても、快適な車内空間であっても、そこからは「どこへ行くか」「行って何をするのか」という目的は「テクノロジー」そのものの中にはない。

現在の日本社会が見失っているのは「目的」であって、それは「専門知識」や「テクニカルな知識」からは得ることはできない。

翻って考えてみるに日本社会や北京の日本人社会(大学も一般社会も)において人気があるのは、「すぐ役に立つ技術的知識」を書いた本やそれに関連するような講演である。『効率が何倍もアップする知的なんとか』とか『成功を呼ぶなんとかの法則』とか内容的には当たり前と思われることばかりの内容を新語や造語やフレームを駆使して、さも知的生活の極意であるかのように見せている、中身の浅いハウツーマニュアル本がもてはやされている。

内容があって思考を促す重厚な本よりもこうした「お手軽本」のほうが、日本でははるかに売れるし、著者も儲かるしくみになっている。

つまり、大衆ウケし、中身の単純さ、わかりやすさといった偏った一方的な商業主義的価値観に卓越したものだけが選ばれていく。

そして少し時間がたてばこうした本は、古本屋で捨て値で売られており、また、新しい装いを持たせた似たような内容の本が、市場には売りに出されることになる。

商品の実質価値と交換価値とを区別し、資本主義社会は実質価値を交換価値へと貶めてしまうことを

指摘したのはマルクスだった。

そして彼は、その架空の交換価値が実物の価値にかわって本当の価値であるかのように闊歩する風景が資本主義社会の本質だということをすでに 150 年も前に見抜いていた。(その意味では現代中国は、ほぼ完全に資本主義社会となっているとっていようにおもわれる。数年前、ある基金によって北京大学に竹中平蔵氏が招かれ、「今の中国はビジネスチャンスに満ちています。みなさん自己責任でがんばってください。」みたいな話をして、それに対して北京大学の学生から「どうしたら先生のように成功できるのでしょうか」といった質問がでていた光景を目撃したため息が出たことがある。)

しかし、こうした本を何冊読んでもおそらく本当の教養は身につかないだろう。

本当に「知」や「教養」に深い考察を加えているのは、加藤周一氏のほうである。ところが前述のような理由から加藤周一氏のような本物の知識人の本は、読まれないことになる。(そもそも内容的には当たり前と思われることばかりの内容を新語や造語やフレームを駆使して、さも知的生活の極意であるかのように見せている、中身の浅いハウツーマニュアル本を批判的に吟味できるリテラシーこそ教養というものではないのか)

これは実は、現在の日本社会において市民科学研究室の会員がなかなか増えないこととも無関係ではないように思われる。(市民科学研究室代表の上田昌文氏が、市民科学メーリングリストで加藤周一氏の追悼を行っていたのも偶然ではあるまい。)

大学でもいま人文系の学問は、「役に立たない」学問として軽視されつつある。企業側からみると大学の学問には問題があるという。

すなわち、大学教育は、企業人としての能力を培うようなものにはなっていない、なにやら役にもたないひからびた知識を教えるところだということのようだ。

たしかに、大学が現実社会の動きに対応しきれず、会社の現実を見落としてきた(だから日本の大学のなかには経済原論という科目はあっても会社原論という科目は設けられなかった。)ことはいなめないように思う。しかしそれとは別の次元では大学は、単に実務的なテクニックを詰め込むところなのかという問いが立てられなくてはならない。

それでは大学は、大学である必要はなく専門学校になればいいのではないか。

それは新自由主義の露骨な反映であり、道具的理性をもった精神なき専門家が、大量に養成されつつある現在、この本は「教養」をとらえなおす一冊として評価できると思う。「専門知識」や「テクニカルな知識」とは別次元にある市民科学に関心を寄せる人間には、この本は、有益な一冊なるだろう。(以上の文章を加藤周一氏の追悼文にかえさせていただきたい。)

3◆ 小野俊太郎『モスラの精神史』(講談社新書 2007)

加藤周一氏は、東京大学医学部の学生だったころから中村真一郎氏や福永武彦氏といった人たちと文学活動を開始していた。しかし、この加藤氏の盟友であった中村真一郎氏や福永武彦氏そして堀田善衛を加えた三人こそ、モスラの原作者であった。

そもそもの原作は、『発光妖精とモスラ』というものだったが、そこに東宝のプロデューサーの田中友

幸氏らの尽力で特撮映画『モスラ』が誕生する。

私はゴジラへの関心から読み始めたのだが、中国にいるのでこの本の中の次のような指摘が興味深かった。

すなわち「本多猪四郎は、満州など中国戦線へ都合三回従軍し、江漢で敗戦を迎えたので、幻想の核となる南方体験は持ち合わせていなかった。設定などはあくまで関沢にまかせたという。他の関係者も原作側の中村真一郎と福永武彦はそれぞれ国内にいたが、堀田善衛は特務機関と関係し上海で敗戦を迎えた。田中友幸は中国南部、古関裕而は中国北部へと従軍した。」(75 頁) という指摘である。なるほど『モスラ』の製作にかかわっていた人はかなりの人が中国に来ていたのかと思った。

またザ・ピーナツが小美人として歌うよく知られた「モスラの歌」

モスラヤ モスラ
ドゥンガン カサクヤン
インドウムウ
ルスト ウィラードア
ハンバ ハンバムヤン
ランダ バンウンラダン
トゥンジュカンラー
カサクヤーンム

は実はインドネシア語で、「モスラよ／永遠の生命 モスラよ／悲しき下僕の祈りに応えて／今こそ蘇れ／モスラよ／力強い生命を得て 我らを守れ 平和を守れ／平和こそは／永遠に続く／繁栄の道である」という意味であるということが指摘されている。モスラが平和怪獣といわれるゆえんである。

また当時の水爆実験や「核の平和利用」の問題なども扱われている。

ゴジラがこれまで唯一勝てなかった怪獣は、メカゴジラでもなくキングギドラでもなく実はモスラであった。そのモスラに本格的な光をあてた本書は

「怪獣の科学史」研究としてのモスラ研究の出発点となる書であろう。■

●上田 昌文

1◆『ワインの科学』(ジェイミー・グッド 著/梶山あゆみ 訳、河出書房新社 2008)

2008 年は私のワイン開眼の年だった。といってもたいしたことではなく、ワインを選び、味わいながら飲むのに意識的になったというだけのこと。選ぶワインは 1000 円前後のもので 2000 円を超えるものにはめったに手を出さない。飲むペースも 1 週間に 1 本か 2 本程度。必ず夕食といっしょにたしなむ。“安くって旨い”ワインを自分なりにどう選ぶかが楽しい。ネットにはワイン通たちの、すごい情報量できれいな写真満載のブログがいくつもある。それらも参考にしながら、手近なワインショップ(行き慣れた所が数カ所ある)で「今日はこれでいってみよう」と 1 本を選び、家に帰ってじっくり味わう。ブドウの品種、産地、生産者によって味の傾向がどう違うかが多少なりともつかめるようになってくると面白い。入門書や雑誌記事などもいくらか目を通したが、ワインをテーマにした本で一番面白かったのが、『ワインの科学』だ。テロワール(地味)、酸化防止剤、遺伝子組み換えブドウ、天然コルク、ワインと健康…と豊富な話題を取り上げて、科学的に何がどこまでわかっているのか、味わいを高めるのに科学がどう生かされているのかを、じつにわかりやすく生き生きと語っている。これはサイエンスライターの誰もがお手本とすべき見事な書きっぷりだと思う。人気漫画『もやしもん』(石川雅之作、講談社)の第 6 巻もワインを扱っていて、楽しく読めた。ワインの基礎知識を面白く読ませる作者の技量はなかなかのものだ。

優れた科学書という点で心に残っているのは、私の積年の関心が反映するが、『ダーウィンのジレンマを解く 新規性の進化発生理論』(カーシュナー&ゲルハルト著、みすず書房 2008)、『シマウマの縞模様の模様 エボデボ革命が解き明かす生物デザインの起源』(キャロル著、光文社 2007)の 2 冊。ともに一般の生物学者が著したレベルの高い一般向け著作である。生物学の中心の中心とも言うべきテーマ、発生・遺伝・進化の三つを統合的にとらえて解明せんとする科学が、今まさに成立しつつあるその息吹を、これらの本は伝えている。

2◆『白の闇』(ジョゼ・サラマーゴ 著/雨沢泰 訳、NHK 出版、新装版 2008)

現存の作家で今一番旺盛な創作力を示し質の高い作品を世に送り出している人は誰か? 1998 年のノーベル文学賞を受賞したポルトガルの作家、ジョゼ・サラマーゴ(José Saramago)は間違いなくその一人に数えられるだろう。今年、彼の『白の闇』(英語では『Blindness』)が映画化されて公開された。それを機にこの作家に興味を持った人はどれくらいいるのだろうか? 代表作の一つと目される『白の闇』のすごさは多言を要しない。20 世紀の小説全体の中でも、巻措く能わず、一気に読まないではおられない迫力を持つ屈指の作品だろう。阿鼻叫喚と汚辱を描いて決して扇情的にならない、透徹した眼差しの筆致がここにはある。他に日本語訳で読めるのは、『修道院回想録—バルタザルとブリムダ』『リカルド・レイスの死の年』『あらゆる名前』で、それだけでも、奔放な歴史的想像と緻密な寓話的世界の描出で、現実社会を違った位相でとらえることのできる精神の可能性を浮上させる、この作家の手腕に感心させられるだろうが、英語にはすでに訳されている『Cave』『Seeing』『Death with Interruptions』

などの日本語訳が現れれば、80 歳を超えての創作のさらなる深化に驚嘆を覚えるだろう。

「文学」に関連して、邦訳が望まれるという点で挙げておきたいのは、米国の農民作家・詩人・評論家の Wendell Berry の諸著作（『ライフ・イズ・ミラクル—現代の迷信への批判的考察』（法政大学出版局 2005）という評論集の訳書が一冊だけ出ている）。エコロジー運動をすすめる、あるいはそれに深い関心を寄せる先進的な欧米の知識人の間では、Berry は広く尊敬を寄せられている作家であり、去年は彼を論じた評論『Wendell Berry and the Cultivation of Life: A Reader's Guide』（Bonzo&Stevens, Brazos Press2008）も出た。また近日発売される『The One-Straw Revolution: An Introduction to Natural Farming』（New York Review Books Classics の 1 冊、福岡正信『自然農法 わら一本の革命』の英訳本）に Berry は序文を寄せている。

「文学」そのものを論じた本で、日本の知識人に一つの教養の尺度を提供しているのが、2008 年に亡くなった加藤周一氏の『日本文学史序説』であろう。これを読めば、多くの日本人が「古文」「現代文」として名前とそのさわりくらいは中学と高校で習っただろう古典作品の一覧が、いかに狭隘な文学のとらえ方の産物であるかがわかる。加藤氏が挙げた広義の文学の日本語作品の代表作（そこには『正法眼蔵』や『三酔人経綸問答』や『ロマ書の研究』などが含まれる）が、広く日本の知識人たちの教養として共有されるのは望みがたいかもしれない（いわゆる文語文や古文や漢文が、外国語以上に遠い存在に感じる人は少なくないだろう）。しかし、彼の簡潔でありながら示唆に富む個々の作品の論評からヒントを得て（ヒントというより、懦夫をして立たしむる知的迫力と言うべきか）、それぞれがそれぞれなりに古典への接近をはかることはできる。自分と古典との新たな出会いの導きの糸としても機能するところが、この本の偉大さの証左であろう。

3◆『クラシック新定番 100 人 100 曲』（林田直樹 著、アスキー新書 2008）

1 冊 880 円の新書だが、その価値は 100 倍の 8 万円ほどになる、と言うと、驚かれるだろうか？ だがそれは誇張でない。この本に紹介された 100 曲は、すべて[この本のために特設されたウェブサイト](#)を通じて、聴けるのだ。ナクソスレーベルの全面的なバックアップで実現した素敵な企画だ。素敵なのはこのガイドブックの本文も、であることを強調したい。「ヘンデルの音楽には不思議と革ジャンがよく似合う」「日本国憲法第 9 条の“9”は、私にはベートーヴェンの“第 9 交響曲”の“9”を思わせる」「もし子どもを産んだら、カルメンは自由な女のままいられるだろうか？」といった、作品・作曲家との長いつきあいが熟してはじめて得られただろう個性的な切り口で、奥深く幅広いクラシック音楽の世界を、その豊かさを匂い立たせつつ様々に劈開するガイドは、今までなかったのではないか。「私だったら、この作曲家ならこれとは別のあの曲を挙げるな……」といった想像をかきたてる刺激を与えられるのが楽しいし、相当にマニアックな人でも思わずうならされるキラリと光るさりげない記述にそこここで出会うだろう。

じつはこの本の存在を知ったのは、あるインターネットのサイトでだった。最近のブログの発達が、趣味・嗜好の世界をどれほど豊かにしているかは、驚かないではいけない。私にとって昨年出会った

素晴らしいサイトの一つに「[Taubenpost～歌曲雑感](#)」がある。おそらくこのサイトの作者フランツさんはきっと私と同世代だろう。フランツさんが愛情と手間暇を傾けて、たとえばオランダの名歌手エリー・アメリング (Elly Ameling) に関する情報をかくも詳細にアップしてくれているのは、どんなにありがたいことか! 「(かつてのレコードの CD 化が行われなかったので) もう 聴けないのかな……」とあきらめ気味だったのだが、アメリングの活動を記念してまとめて発売された CD 「Elly Ameling 75 jaar: Live Concertopnamen 1957-1991」(5 枚組) や「The Artistry of Elly Ameling」(同じく 5 枚組) が出ていることを教えられ、一挙にその渴きを癒すことができた。なんという幸せ! アメリングの歌こそ、“青春” という 言葉で表徴できる過去が私にあったとすれば、我が青春の甘美なる心の恋人であり支えであったのだから。

音楽に関連して、2 つのコンサートが特に心に残った。一つは、「邦楽最前線」(1 月 25 日、国立劇場小劇場) であり、すでに[個人ブログ](#)で 語った。もう一つは「三善晃 合唱音楽の夕べ」(3 月 9 日、杉並公会堂大ホール) で、三善晃の数多い合唱曲から精選した 10 曲を 14 の合唱団が持ち回りで歌う、というぜいたくな企画だった。2008 年は CD でも『三善晃の音楽』(カメラータ・トウキョウ、3 枚組) が発売され、彼の創作活動の全貌に迫る一つ の手がかりが与えられたが、どなたか、彼の合唱曲全集を企画して完成させてくれはしまいか? 多数の市井のアマチュアによって演奏されることで親しまれ愛されてきたという点では、現存の日本の作曲家の作品では、三善晃の合唱曲は戦後の突出した存在ではないだろうか (難易度が高いので、演奏は大変なのだけれど……)。

音楽にからんでもう一つ。ソニーから 2007 年に発売された「ハードディスクオーディオ レコーダー NAC-HD1」は、民生用録音機器としては究極のモデルになっているのではないか。LP レコード → CD → MD → HD オーディオという録音媒体の進化は、録音・編集とライブラリー作成・保管・携帯の容易さで来るところまで来たという感じがする。この録音器には CD 約 380 枚分が収録できる。私自身はタイマー機能を使って、デジタル衛星放送「ミュージックバード」を受信し、発売間もない新譜を録音・再生して楽しんでいるが、その音質の良さ、編集作業の 簡便さには舌を巻く。ライブ放送を含めて、新しい演奏を幅広く録音して聴こうとする方には特におすすめの機器だ。■